自由学校 遊（ユウ）

2018
4月

ゆうひろば

ICAN ノーベル平和賞受賞記念
川崎哲さん講演会
（2018．4．21．札幌エルプラザ）

小特集1 **節目を迎えた植村裁判**

植村訴訟のいま ・・・2
植村裁判札幌訴訟 略年表 ・・・4
裁判傍聴記 ・・・5

小特集2 **海外で暮らす、働く**

世界に飛び出す君たちへ ・・・6
中国も台湾も好きなのに ・・・8
相性のいい国～ネパール ・・・10
米国とわたし ・・・12

寄稿　北の鉄路の再生・存続と地域発展をめざして ・・・・14
つんどく屋　『種子法廃止と北海道の食と農』 ・・・・15
連載　東さんのボロボロ日記　（第97回） ・・・・16
連載　フィールドワークな日々（第73回） ・・・・17
連載　きままに俳句（第15回） ・・・・18
事務局便り　ほか ・・・・19

遊通信
第166号

小特集 1

節目を迎えた植村裁判

植村さんは現在、ソウルの韓国カトリック大学で客員教授として講義をしつつ、東京と札幌の裁判に、そして各地での講演にと飛び回っています。この裁判が植村さんの名誉回復だけでなく、報道のあり方、「慰安婦」問題と歴史修正主義、ヘイトスピーチと表現の自由など、様々な課題を提起していて、いつも傍聴席は満杯です。本人尋問を終えたこの機会に裁判をふりかえってみました。

植村訴訟のいま

成田 悠葵

1 植村訴訟の概要

元朝日新聞記者・植村隆氏が、櫻井よし子氏に慰安婦記事を「捏造」と断定されたことによって名誉を毀損されたとして、櫻井氏と出版社3社（新潮社、ダイヤモンド、ワック）を相手に、2015年2月10日、謝罪広告や損害賠償を求め、札幌地裁へ提訴した。

2 訴訟の争点

櫻井氏が、「捏造」と断定する植村氏の記事（1991年8月11日）は、以下の文章から始まる記事である。

『日中戦争や第二次大戦の際、「女子挺身隊」の名で戦場に連行され、日本軍人相手に売春行為を強いられた「朝鮮人従軍慰安婦」のうち、一人がソウル市内に生存していることが分かり、「韓国挺身隊問題対策協議会」（尹貞玉共同代表、16団体約30万人）が聞き取り作業を始めた。』（ここで登場する匿名の元慰安婦女性が、金学順（キムハクスン）氏である）。

論点は多岐にわたるが、櫻井氏が「捏造」とする論拠のうち、主要なものは以下の点である。

①「慰安婦」と「女子挺身隊」が異なるものであるのに、両者を結びつけて書いたこと、②日本が女子挺身隊ないし従軍慰安婦を強制連行した事実がないのに、金氏を強制連行された女性であると書いたこと、③金学順氏は親に売られた女性であるのに、そのことが植村氏の記事にはあえて書かれていないこと、である。

これら①～③が、真実であること、または、真実と信じたことに相当の理由があることを櫻井氏が立証しなければ、名誉毀損の違法性は阻却されない。

この争点に関連して行われたのが、以下の尋問である。

3 喜多義憲氏の証人尋問（2018年2月16日）

元北海道新聞記者の喜多氏は、証人尋問の中で、1991年8月14日、金学順氏に単独インタビューを行った際、金氏が自身のことを「挺身隊（チョンシンデ）」と語ったときのことなどを詳細に語った。そして、喜多氏は、ほとんど同じような時期に同じような記事を書いたのに、植村氏は捏造記者と呼ばれ、自分は何も言われていないことに黙っていられないと述べ、ジャーナリストとしての矜持を語った。

この喜多氏の尋問により、植村氏の記事と間近い時期に、金氏が、自らのことを「挺身隊」と言っていたことが明らかになった。

4 植村氏の本人尋問（2018年3月23日）

植村氏の主尋問では、植村氏は、当時、韓国で「慰安婦」のことを「女子挺身隊」と呼ばれていたことや、前述の記事は挺対協の尹貞玉氏への取材や録音テープの聞き取りなどの取材結果を踏まえて、事実を捻じ曲げることなく書いた記事であること、金氏が意に反して慰安婦にさせられて、監禁され、繰り返し日本軍人にレイプを受けたという一連の状況を「連行」と表現したことなど、捏造記事ではないことを詳細に語った。また、不当な「捏造」バッシングの中で、植村氏本人や家族、北星学園大学に及んだ深刻な被害についても、切々と語った。

反対尋問では、慰安婦と女子挺身隊を結びつけた点や、吉田清治の証言や著書との関連性に関する質問が集中した。しかし、植村氏は、当時の取材に基づいて書いた記事であること、吉田清治証言と結びつけて書いた記事ではないことを、冷静に回答した。これによって、「捏造」とは程遠く、植村氏が誠実に取材・報道を行ってきたことが明らかとなった。

5 櫻井氏の本人尋問（2018年3月23日）

植村氏の尋問に続き、櫻井氏の尋問が行われた。

主尋問では、櫻井氏が、慰安婦問題に関して行ってきた取材を語り、植村氏の記事に「捏造」という評価を加えることは正当なものであることを述べた。他方、櫻井氏は自身の論文で、「訴状には、14歳のとき、継父によって40円で売られたこと、…」と書いたが、誤りを自認し、訂正することを述べた。

反対尋問では、櫻井氏の論拠が十分な調査に基づかないものであることを、証拠を示しながら、ひとつひとつ確認していった。

櫻井氏が誤りを自認した訴状40円問題について、櫻井氏は訴状を入手しており、容易に確認できたのにしなかったことや、金学順氏が自身のことを「挺身隊」と言っていたかどうかについて、複数の韓国の新聞で金学順氏が自身のことを「挺身隊」と語っていたことが報道されていることなど、櫻井氏の主張と矛盾する事実を示す証拠を示していった。

反対尋問の最後には、かつて、櫻井氏が福島瑞穂氏との架空の会話を作り上げていたことについて、植村氏の代理人が「ここで言ったことは、まるっきりのうそじゃないですか。」と質問したところ、こともあろうに、櫻井氏は「朝日新聞が書いたこともまるっきりのうそだと私は思っています。」と開き直った。櫻井氏のジャーナリストとしての姿勢が垣間見えるシーンであった。

6 結審、判決へ

植村訴訟は、次回（2018年7月6日）で結審が予定されている。そして、秋頃には、第一審判決が出る見込みである。これまで多大なご支援を頂いておりますが、引き続きご支援をよろしくお願い致します。

成田 悠葵（なりた ゆうき）
1987年、北海道生まれ。中央大学・同ロースクール卒。2013年12月、弁護士登録。札幌協和法律事務所所属。植村訴訟弁護団に提訴時から参加。

東ティモール
マウベシ珈琲
オーガニックカフェやショップで販売中
フェアトレードの美味しいコーヒー！！
NPO 法人 ほっかいどうピースストレード
TEL 070-5619-3222
hokkaidopeacetrade@gmail.com

植村裁判

札幌訴訟 略年表 2014→18

2014年	1.30　週刊文春が「”慰安婦捏造”朝日新聞記者がお嬢様大学に」の記事を掲載(2月6日号)
	3-　神戸松陰女子学院大学が植村隆氏の教授就任契約を解消。植村氏が朝日新聞社を早期退職
	5-　植村氏が非常勤講師を務める北星学園大学に対する抗議や脅迫、いやがらせが始まる
	8.4-5　朝日新聞が慰安婦報道検証記事を掲載、「植村氏の記事に事実のねじ曲げない」と説明
	8-　新聞雑誌テレビがいっせいに朝日批判開始、北星学園大と植村氏・家族へバッシングが激化
	10.6　全国の大学人ら43人が呼びかけ「負けるな北星！の会」を結成。東京、札幌で記者会見
2015年	1.9 植村氏が文藝春秋と西岡力氏を東京地裁に提訴　2.10 櫻井よしこ氏らを札幌地裁に提訴
	4.27　東京地裁で東京訴訟第1回口頭弁論、植村氏が意見陳述。以後、2018.4.25まで12回開廷
	5.29　札幌地裁が櫻井氏側の申立を認め訴訟を東京地裁に移送すると決定。植村氏側は即時抗告
	8.31　札幌高裁が札幌地裁の東京移送決定を棄却。11.25櫻井氏側の特別抗告を最高裁が棄却
2016年	2.26　植村氏が手記「真実」を岩波書店から刊行、3.1 韓国カトリック大学客員教授に着任
	4.12　「植村裁判を支える市民の会」発足、記者会見を札幌で開く。公式ブログで呼びかけ発表
	4.22　札幌地裁で第1回口頭弁論、植村、櫻井両氏が意見陳述。報告集会で佐高信氏が講演
	5-　週刊金曜日が「私は捏造記者ではない――検証・植村バッシング」抜き刷り版を発行
	6.10　第2回口頭弁論。「事実の摘示」論を中心に主張展開。報告集会で玄武岩氏が講演
	7.29　第3回口頭弁論。「名誉棄損」個所を具体的に指摘。報告集会で野田正彰氏が講演
	8.3 植村氏の長女をツイッターで中傷した男に対し、東京地裁が損害賠償支払いを命ずる判決
	8-9 植村氏が全国講演ツアー(北海道、愛知、九州の12市町)で「私は捏造記者ではない」と訴える
	10.31「負けるな北星！の会」が解散を宣言、「大学と市民をつなぐ貴重な実践だった」と総括
	11.4　第4回口頭弁論、被告側が「事実摘示」の主張を一部変更。報告集会で俵義文氏が講演
	12.16　第5回口頭弁論、審理促進をめぐり対立し意見を応酬。報告集会で渡辺美奈氏が講演
2017年	2.2-5　植村氏が沖縄で講演と講義で「私は捏造記者ではない」と訴える。地元紙が大きく報道
	2.10　第6回口頭弁論、櫻井氏の違法で悪質な言説を糾弾。報告集会で外岡秀俊氏が講演
	4.14　第7回口頭弁論、櫻井言説によるバッシング拡散を論証。報告集会で崔善愛氏が演奏
	7.6　記録集「市民はかく闘った――北星学園大学バッシング」が刊行される
	7.7　第8回口頭弁論、「主張整理案」をめぐり意見を交わす。報告集会で内海愛子氏が挨拶
	7-　吉見義明・元中大教授の名誉棄損訴訟で最高裁が上告を棄却し、吉見氏の敗訴が確定した
	8.4-22 植村氏が全国講演ツアー(北陸中部中国九州10市)で「私は捏造記者ではない」と訴える
	9.1　植村氏が産経新聞社の記事訂正を求めて東京簡裁に調停を申し立て。東京で記者会見
	9.8　第9回口頭弁論、岡山裁判長が証人尋問期日を設定。報告集会で田中宏氏が講演
	10.13、11.22　訴訟進行協議の報告集会で、高島伸欣氏、楊井人文氏が講演
	11.22　「植村裁判を支える市民の会」と東京支援チームが「徹底解説マガジン植村裁判」を刊行
2018年	1.6 植村氏支援コンサート「忖度を笑う、自由を奏でる」東京で開催。松元ヒロ、崔善愛氏出演
	1.11　訴訟進行協議後に、「植村裁判を支える市民の会」の新春の集いを開催（自治労会館）
	2.16　札幌第10回口頭弁論、証人尋問を実施予定。報告集会で池田恵理子氏が講演
	3.23　札幌第11回口頭弁論、植村氏と櫻井氏の本人尋問。安田浩一氏と能川元一氏が対談
	7.6　札幌第12回口頭弁論、原告と被告双方が最終の弁論を行い審理終了（結審）の予定

2018.3.23.
裁判傍聴記

植村訴訟最終弁論を傍聴して

櫻井よしこ、植村隆両氏の出廷した初回と今回の弁論を、幸運にも共に傍聴できた。初回の冷然とした姿が今回は、資料引用の不備など鋭く指摘されて悄然となった櫻井氏に対し、国際的な支援にも支えられている植村氏の昂然とした姿勢は対照的だった。

裁判長の明快な訴訟指揮や『銀河通信』などの的確な裁判報告は頼もしく感じた。

私は「性被害者の体験は気の毒で聞くに堪えない」という感情が強く、現職時代に被害者の証言を生徒に紹介することはできなかった。

教科書に「慰安婦」が載り、「同じ年の少女たちが！」と中学生のいわゆる「ツッパリ」の生徒がより真剣に学ぶ状況を聞いてショックを受け、考えさせられた。

松井やよりの終末期を撮影したビデオや自伝を見て、遅まきながら「性も人権」の認識を深めた。宋神道（ソンシンド）さんのビデオで、同じ日本軍の「軍人」と「慰安婦」に対する不平等への怒りから戦い続けた姿勢には、強い感銘と共感を持った。

戦後補償運動の中で「歴史研究」と「性も人権」の意識は、十分かみ合ってこなかったと思う。

しかし「女性国際戦犯法廷」攻撃から二〇一五年末の「慰安婦」問題〝日韓最終合意〟に至る、安倍晋三らの歴史の偽造は断じて許せない。そして今、植村裁判闘争の中で新しい人権意識と研究の深化を感じている。

林恒子（はやしつねこ）
元高校教員。退職後も戦争体験の継承、女性史研究に従事。

被告 櫻井よしこ氏の尋問を聞いて

証言席に浅く腰をかけ、背筋をピンと伸ばす櫻井よしこ氏は、あっさりと自らの間違いを認めた。反対尋問にて、櫻井氏が助けを求めるように弁護団を見る瞬間が、3回あった。いずれも植村弁護団の川上弁護士に、訂正を約束した記事や発言について指摘されたときだ。さらに、櫻井氏が訴状も見ずに、取材もせずに執筆していたことも明らかになった。

反対尋問で櫻井氏をたたみかけるように問いただす川上弁護士を見ていると、ドラマや映画の世界に入り込んだようだった。圧倒的な証拠と、それを前提にした川上弁護士による質問で、植村氏が「捏造記者」ではないという事実は、証明されたようにも思える。

「朝日新聞が書いたこともまるっきりのうそじゃないですか」。追い詰められた櫻井氏は尋問の終盤、吐き捨てるようにこう述べた。

裁判での櫻井氏の発言から、差別や排外主義が深く根付いていると感じた。歴史を自分にとって都合よく解釈している。少なくとも彼女から「ジャーナリスト」として、人々の平和と人権を守るという意識を感じることはできなかった。それどころか、取材もせずにうそを書くことが「ジャーナリスト」のすることだろうか。

最後に確認しておきたい。慰安婦問題の本質は、人身売買説でも、櫻井氏が否定し続ける「強制性」でもない。戦時中に慰安婦とされた女性たちの人権が踏みにじられたことであり、彼女らの言葉にもならない悲しみの歴史である。

大瀧哲彰（おおたきてつあき）
学生時代はピースボートで世界を周り、今春からは駆け出し新聞記者として地方をじっくりと周ります。

小特集 2

海外で暮らす、働く

「遊」の周辺には、軽やかに国境を越えて海外で活動する人たちがたくさんいます。普通の市民の目線から見たその地の人々の暮らしや文化、政治状況などをこれまでも海外だよりで伝えていただいてきましたが、今号ではもう一歩踏み込んで、海外をめざした動機や苦労したこと、それをどう乗り越えたかなど、個人としての経験や思いを語っていただきました。夢を追って、違う可能性を求めて、あるいは日本を脱出したいという場合も、海外で暮らしたり働いたりするという選択肢もありうる時代になった今、海外での生活の具体的な側面に触れ、自分ならどうするかとイメージを膨らませる機会になればと思います。

世界に飛び出す君たちへ
――「想定外」を恐れないこと

高橋 一

若いときには、海外で働くことはおろか、暮らすことさえ考えたことはなかった。

若いときは、自分がこれから果たして生きていくことができるのか、どうしたら生き続けることができるのか、不安と恐れでいっぱいだった。大学の授業にはほとんど出ず、図書館に入り浸って、ありとあらゆる本を渉猟する毎日だった。「君は純哲（純粋哲学の意味らしい）をやったらどうか」と、当時の西洋古典学（古代ギリシャ悲劇やギリシャ哲学を学ぶ分野）の教師から言われたこともあった。「死の問題」や「人間の罪」、「他者との関係」に答えを見出せないでいたわたしに、手を焼いて語ってくれたのであろう。自主留年の末、後に牧師養成の神学校に進み、なんとかプロテスタント教会の牧師になったのは、ある意味では当然であったかもしれない。

転機は突然訪れた。当時、教会で積極的に協力していた日本キリスト教海外医療協力会（ＪＯＣＳ：当時の会長は労働経済学者の故・隅谷三喜男氏）というキリスト教ＮＧＯから、ある日、医療者の妻と共に、カンボジアに設立するＪＯＣＳプノンペン事務所で働く気持ちはないかと打診されたのである。牧師になって10年が経っていた。

当時のカンボジアは、国連カンボジア暫定統治機構（ＵＮＴＡＣ）によって、23年に及ぶ内戦終結の複雑な手続きが行われている最中であった。ＪＯＣＳはそれまで、日本のＮＧＯの中では、ＪＶＣ（日本国際ボランティアセンター）、ＳＨＡＲＡ（国際保健協力市民の会）、曹洞宗国際ボランティア会（現在のシャンティ国際ボランティア会）などとともに、１９８９年からカンボジアでの保健医療活動を始めていた。日本政府もカンボジアに正式に関与する以前であったと思う。

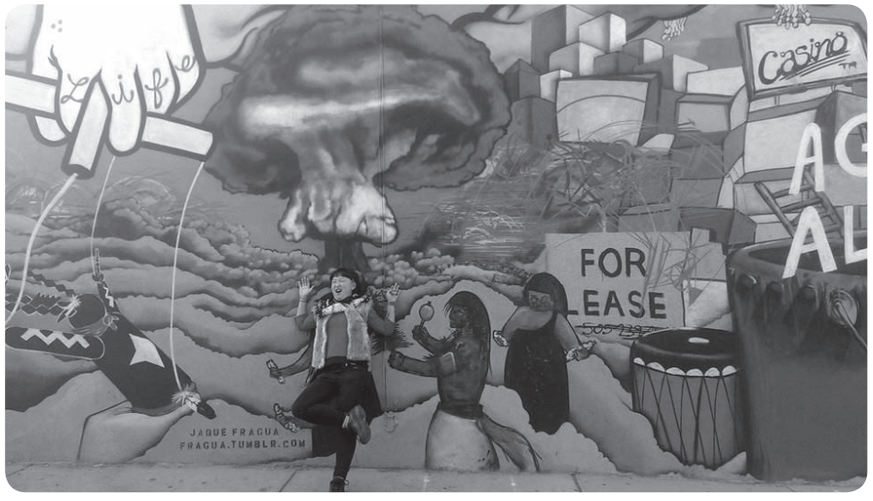
最終的に教会を辞し、カンボジアに赴任したのは１９９３年１月のことであった。

「海外で生活する」という主題であるが、わたしの場合はかなり特異なケースではないかと思う。わたし自身間もなく40歳になろうとしていた。それまで海外で暮らしたことはなかった。が、もしみなさんの中で、将来海外で暮らしたり、働きたいという気持ちがある人がいれば、わたし自身の貧しい体験ではあるが、以下のことを心に留めておいてほしいと思う。

海外での生活では（ほんとうは日本にいても同じだと思うが）、まったく思いもかけなかった事態に必ず出会う。いわば「想定外」にぶつかるのである。わたしはこの「想定外」の事態にどう対処するかで、今までのその人が蓄積してきた知的・人間的力量の総体が問われるのではないかと思う。今まで自分とものの考え方や感じ方の異なる人とどう折り合いをつけてきたか、その人を理解しようとどんな努力をしてきたか、世界や社会の問題にどう思考と行動のアンテナを広げてきたか、また他ならぬ自分自身とどう向き合ってきたかという姿勢が問われる事態に（日本にいる以上に）必ずぶつかるからである。

であるならば、若い時期には、とにかく「想定外」の状況につとめて身を置く挑戦をしてほしい。自分を「想定外」の状況にあえてさらすのである。「遊」が企画する講座は、その意味では「海外生活事前学習」の格好の場になっているのではないかとわたしは思う。

高橋 一（たかはし はじめ）
酪農学園大学教員を経て、現在は、山梨英和大学教員、国際基督教大学（ＩＣＵ）非常勤講師。「遊」理事。



小特集2

「中国も台湾も好きなのに」

細谷 悠生

「なぜ中国語を学び始めたの?」と、よく聞かれます。正直に答えると「おだてられたから」。おだてて乗せて本気にさせて、ついに7年も中国語圏に住むことにさせたのは、私の姉でした。

姉は三国志や水滸伝といった中国の古典が大好きという「中国オタク」。大学は中国文学科に進学して在学中に留学し、標準語に当たる「普通話」はおろか広東語までマスターしてしまうという人でした。「一緒に中国旅行しよう」と誘ってくれたりしたんですが、当時の私はまったく気が向かず、行くことはありませんでした。

ところが姉が帰国後、「遊」で台湾スタディツアーが企画され、参加することに。そのツアーに向けて開講された姉の中国語講座が、私にとって初めて中国語を学ぶ機会になりました。

レッスンは基本的な会話だけでしたが、私が話すと姉は「発音がきれい!」「才能がある!」と大絶賛。日本人はまず発音で苦労するのだそうで、中国語を学ばないなんてもったいないと言われ、その気になってしまったのです。

後に姉は病気で早逝したのですが、病床で何度も私に「絶対中国へ行ってね」「中国語の勉強を続けてね」と言いました。姉の遺言のような気がして、留学を果たすこととなったのです。

留学して最初はアパートの屋上にある、いわば違法建築の部屋に住みました。ところが備品の洗濯機がとても古くて、脱水時に本体ごと動いてしまうほどの振動で、近所からはクレームが出るわ、動いてコンセントが抜けてしまうわという代物でした。ある日、パンツとタンクトップ姿で洗濯機を押さえていたら、騒音に文句を言いに来た階下の人たちが後ろに立っていたことがありました。まるで香港のコメディ映画のようでしたね。

その後半年ほどして、大学の近くでルームシェアをすることに。ネット掲示板で見つけた物件に連絡し、面接を受けました。広告を出したのは出て行く人、面接をするのはこれから一緒に住む人たち。大家は郊外に住んでいて、4LDKの物件をまるごと貸しているだけ。基本的に「自分たちでなんとかしろ」というスタンスで、出る時も、自分で次に住む人を探してその人から同額のデポジットをもらう…というシステムでした。

お見合い情報が貼ってある巨大お見合い公園

「ジャパニーズは礼儀正しいし真面目だからウェルカム」と即決だったものの、アイルランド人男は毎日とっかえひっかえ違う女を連れ込むし、イギリス人は人のジュースを飲んじゃうし、ゴミ収集車が来る時間に、彼らは家にいたためしがない。これで家賃が平等なのはおかしい! と金をふんだくっていたら「ユキは本当にジャパニーズなのか」と言われました。

日本人は群れたがる傾向があって、授業以外は日本人同士でまとまって食事していましたが、留学生活が限られた期間であることを日々強く感じていたので、私はなるべくほかの国の人々と遊んでいました。そのほうが中国語も上達するしね。中国語の新しい表現を覚えた時も、これは日本語にはないとか、スペイン語にはあるとか、覚えやすさが違ったりして。小さな島国にいながら、何十もの国の人々に会って友だちになれる、留学時代に得た宝物です。

留学先は台湾、一度帰国して数年後に上海の会社に就職し5年住んで、また昨年から台湾で働いています。世界中、日本人が多く住む都市には必ず日本語フリーペーパーがありますが、私が勤めるのもそのうちの一つ、現地在住の日本人や出張者の生活に密着した情報媒体です。

日本は近年〝反中ブーム〟で、上海に住む日本人駐在員やその家族も、あまり中国を好きでない人がたくさんいます。私たちはそういう人に、ちょっとでも楽しく過ごしてもらいたい、中国を好きになってもらいたいという思いで、楽しめるような情報誌作りをしています。たとえば交通カード利用での割引か、便利なスマホアプリとかなどの生活の裏ワザや、巨大お見合い公園、大学の学生食堂に潜入などなど。

台北も上海も大都市なので、生活はかなり便利です。こちらでは修理費が安いので、洗濯機でも靴でも直せるものはなるべく直して使いますが、最初はどうしたらいいのか困りました。そういうことがひとつひとつできるようになっていく、これこそが海外生活の醍醐味です。中国では近所づきあいが確かにまだあって、時々ずかずかと家の中にまで入ってくるけれど、節句ごとの名物お菓子をもらったり、水道管の修理屋を呼んでもらったりして、少しずつ生活が豊かになっていくのです。外国人なんだから違っていて当たり前、分からなくて当たり前というところから関係性をスタートできる、ということはある意味で素敵なことだとも感じています。

上海にいた頃よく感じたのが「この街では老人の孤独死がない」ということでした。朝起きたら外に出てご近所さんに挨拶し、洗濯物を干し、エビの皮を剥き、編み物をし、夜寝るまでおしゃべりして外で過ごすのですから。

一方、台北は残念ながら近所づきあいが失われつつあり、私が鍵をインロックした時両隣のお店屋さんはぜーんぜん助けてくれませんでした。暮らしが豊かになると人の手を借りなくて済むようになり、距離ができていくというのは、上海から来た私にはなんだか寂しいです。

公園でトランプ（多分賭けている）

台湾と中国は「両岸関係」にあって、仲がよくない今日この頃。「以前上海に住んでいた」と言うと「かわいそうに」なんて言われますが、そういう人の大多数が中国に行ったことのない人々です。私が中国も台湾も好きだというのも、あまり受け入れてもらえない。政府の関係に、影響されるのは嫌だなあと感じる日々です。

細谷 悠生（ほそや ゆき）
台湾に留学後、2011年から上海、台湾で日本人向け生活情報誌の編集をしている。台湾在住。

小特集2

「相性のいい国～ネパール」

山上 千尋

私の初めての海外旅行先はインドでした。インドは学生時代から興味を持っていて、いつか行ってみたい…という憧れの国でした。思った通りインドが大好きになり、その後何度もインドへ通い、1年以上の長期にわたって旅行したこともありました。私にとってインドの魅力は、人間が個性的で、それを誰に批判されたり、批評されたり、褒められたりするわけでもなく、みんなが共存しているところです。もちろん、ときどき衝突する人たちもいるけれど、あれだけたくさんのいろんな人たちが（時には動物たちも…）いる中で、それぞれが楽しく過ごしていることに圧倒されます。

2011年からJICAの青年海外協力隊でネパールに滞在することになりました。インドに何度か行くうちに「旅行者ではない立場で、海外に滞在してみたい」と思い、協力隊に応募しました。私自身は活動の中で、困ったり辛くなることはあまりありませんでしたが、ボランティアで同期だった友人の2年間が印象的でした。彼女は看護師で、政府が運営する大きな病院に配属され、日本人らしくたいへん真面目に活動していました。私は彼女と活動地域が近かったので、ときどき食事をしたりしていたのですが、話を聞いていると日に日に配属先の病院内で、孤立してきたのがわかりました。彼女もだんだんとやつれてやせ細ってきました。彼女がやっていたことは看護師として模範的で、誰もがそれが正しいとはわかっているのですが、一緒に働くネパール人たちにとっては、自分たちにもその日本人ボランティアと同じだけ、またはそれ以上の働きを求められるということになり苦痛だったのかもしれません。また、日本人とネパール人が考える理想の医療、死生観の違い、穢れやカーストの概念など、一言では語ることのできない文化の壁があったと思います。それでも彼女は2年間、自分の信念に基づいて活動を継続し、任期満了の上、日本へ帰国しました。

私は協力隊から帰国して、あまり時を空けずにネパールで結婚することにしました。先ほど紹介した同期の友人のように真面目ではなかったのがネパールと相性が良かったのかもしれません。私がネパール人と結婚すると日本の家族に伝えた時は、母親はおもしろがって賛成、父親は何か言いたげではあるが反対はせず、祖母はなんでそんなに遠いところに…と寂しそうにしていました。ネパール側の一家は、日本人が一家の一員となることには特に反対はありませんでした。

一家の人たちに対して、私から日本のことを話す機会はあまりありませんが、一家のだれかが日本に出稼ぎに行きたいからなんとかして、とかいう話は時々あります。それから、子どもたちが学校で「日本は地震の多い国だから、地震で崩れた家が自動的に組み立って、壊れてもまたすぐ住める家というのがある」

と先生に聞いたと言って、それは本当か?と、私に確認しに来たことがあります。ネパール人の日本に対するイメージは基本的にとても良く、「テクノロジーがすごい」などと思われています。

2015年にインドで息子を出産しました。インドもネパールも病院出産＝予定帝王切開で、それを初めて知った時はびっくりしましたが、海外に住むとはこういう事なんだなぁと妙に納得して帝王切開で出産しました。出産後は私の体質も、よりネパールに慣れてきた感じがします。ネパールは子どもがたくさんいるので、みんなで楽しく小さい子の世話を焼いています。学校の環境は別として、子育て環境は素晴らしいなと感じています。

現在住んでいる場所はネパールの中で最も東の端にある田舎ですが、年に2、3回、日本人が偶然通りかかって私を発見してくれることがあります。私が住んでいる田舎にはネパール人がよく来るちょっとした観光地があり、ネパール人はバスツアーなどで来たりするのですが、そこに時々外国人や日本人が混じっていて「日本人が近くに住んでいる」という噂を聞きつけた日本人が、家を訪ねてくれることがあるのです。これまで数名の方とお会いし、その後ずっと連絡を取り合っている方などもいます。

ネパールでの生活は、日本のように便利ではありませんが、不便な生活もそれはそれで楽しいなと思います。買い物をしようと思ったら、片道車で1時間（距離的には11㎞…）のバザールまで行かなくてはなりません。なので、買い物は1～2週間に1回くらいしかしません。インターネットも一応ありますが、繋がりにくいのでメールくらいしかできず、その上突然停電になることもしょっちゅうで、夜8時になれば、真夜中のような静けさです。時々、電柱が倒れたり、電線に竹が引っ掛かったりして、突然三日三晩全く電気が来なかったりもします。そんな環境では、子どもと散歩に行ったり、砂遊びするくらいしか暇つぶしはないのですが、それがまた、今は大切な一時だなぁと思ったりもします。大好きなインドに近い（すぐに行ける）環境で、大家族と一緒に楽しく日々生活できることはとても幸せに感じています。でも、ビザなどの手続きについては、はっきり言ってたいへん煩わしいです。それと、自由学校「遊」の講座や様々な社会運動にほとんど関わることができなくなってしまったのは残念に思っているのですが、もう少し子どもが大きくなったら、またネパールからもいろいろなことに関わっていきたいな、と思っています。これが今後の課題です。

山上千尋（やまがみ ちひろ）
札幌市出身。インド好きが高じて（?）インドに極めて近い立地のネパール紅茶の産地で結婚し、大家族と共に暮らしている。

小特集2

「米国とわたし」

萩谷 海

米国に行こう

10歳で学校に行くのをやめて、いろいろなところを転々としながら暮らしていました。学校が嫌いではありませんでしたが、いじめなどの問題に対して、傍観者でいることがとても辛くて、不登校児になりました。中学高校は行ってないです。渡米のために大検を取りました。

現在の子ども食堂の走りになった川崎の「フリースペースたまりば」でご飯食べさせてもらったり、同潤会アパートや浅草あたりで会った道端の人と話したり、アルバイトをしたり・・・。「日本は英語ができるということにすごく価値を置く国だから英語ができればバカにされない」と言われてNHK基礎英語を聞いていました。

22才で会社をクビになったときに『全米高校全教科独習書』という本に偶然出会いました。「あなたが得た教育は誰も奪うことはできない。この本は、学校に行かなかった人たちに宛てた本です」と書かれていて、電車の中で読んでいておもわず涙がこぼれました。あぁ、私は誰かにそういうことを言って欲しかったんだなと。日本の不登校の子どもたちにこういう本があったらと思って、巻末にブルックリン・カレッジとあったので、そこに電話しました。40分くらい話し込んで、独学でも結構言いたいことが言えて、あなたが勉強しに来ればいいと言われたんです。

日本人と性産業

2005年に渡米して、ニューヨーク市立の短大から始まって移籍、転校が6校。働いていた期間も合わせてニューヨークとカリフォルニアに9年いました。

学費の苦労や不登校、独学したことなど、日本なら「駄目だ」と思っていたような条件について、米国だと「それもマイノリティ当事者の経験だから、自分を売りこむ機会にしなさい」と言われ、奨学金をもらったりしました。

本屋、運転手、モデルやストリッパーをやったり、セックスワーカーの斡旋、いわゆるポン引きもしました。性産業に関わっている人々が身近にいて、アジア人女性の売春宿みたいなところは危険なところが多かったので、それを避けるために日本人駐在員を斡旋しました。

日本人男性はほとんど性教育を受けたことのない人たちで、人権侵害や性暴力はざらにあってセイファーセックスなんてまったく知らない。女性の方も大差なくて、性について

の基礎知識がないんです。渡米前にソープランドで働いてきた女性でもそう。病気のリスクとか、自分の身体のこともよく知らない。70年代後半から80年代生まれの女性たちの性意識がそんなものだというのは、ショックでした。性についてのタブーのない家庭環境で育って、父親とも性について普通に話したり、『モアリポート』を読んだり、基本的な知識は身につけていたので、安全のための決めごとや交渉も相談して進めました。

ポン引きはおもしろかったですね。私の友人たちが、性産業に従事していることで、日本人の社会で悪く言われたり、彼氏とうまくいかなかったりで、日本語のカウンセリングを探しまくったけど、駐在員の奥様向けのカウンセリングしかないんですよ。これは自分たちでがんばんなきゃいけない、性暴力カウンセリングは必要だと思って、カリフォルニアのサンフランシスコ州立大に留学先を変えました。その後資格を取ってNPOで性暴力のカウンセラーをしましたが、それまでの経験があってのことです。

個人として通訳やNPOの日本太平洋資料ネットワークでも働いていました。日本から来る官公庁やNPOの人とか学生向けに、米国の社会問題を扱う団体に視察やボランティアで入って、課題や学び方を一緒に考えるツアーやプログラムを行いました。

東日本大震災の時は、タガログ語を話すグループに助成金を送るとか、大組織のお金が届かないマイノリティの人たちに向けて、まずガイガーカウンターとガソリン代、事務や視察費用を送る基金の運営をしました。米国の個人や助成団体に情報提供したりプレゼンをしたりして対象とつないでいく役目ですね。

絶対的な他者

日本ではみんな違ってみんないいとか、多様性は素晴らしいとか言いますが、米国では単純に多様性を肯定しない。他者と一緒にいること、時間や空間、歴史を共有するということはしんどいことだ、辛いから工夫をしようということだと思います。他者というのは絶対にわからないものだという自覚の上に関わっていく。

いろいろな意味で日本を背負わされることがありましたが、その時も東アジアを侵略した日本人であり、一方で性的にも知的にも消費されるアジア人女性としてビザにすがって生きるマイノリティでした。そのわかりにくさって大切で、単純明快に手渡さずに、居心地の悪さと付き合っていく。それが多分米国の一番素敵なところでしょう。

米国では9年間で13回引越しました。最後に住んだオークランドは、第2次世界大戦中は軍事産業地帯で貧困の連鎖が今もある街でしたが、農業や教育のNPOの人たちと一緒に住みながら、新参者が地域でどうやって暮らすか、自分を開きながら生活をすることを学んだように思います。

3・11以降、海の向こうにいる日本の人たちを思いながら、核兵器を作り続けている米国にいること、そして日々の外国人としての寄る辺のなさと向きあう中で「当事者」や「現場」に対する考え方も随分変わりました。

公民権運動、ネイティブ・アメリカン、障がい者の運動などの当事者の運動があって、一人ひとりが個別のアイデンティティを持つ当事者だということが言語化されてきているのは、大きな宝だと思います。生きること自体が社会変革であり、選択をする権利が他人にもあると信じるところも米国の好きな部分です。

（インタビュー・まとめ／細谷　洋子）

萩谷　海（はぎたに　うみ）
横浜育ち。2014年に帰国し、現在は、札幌在住。主として、介助・通訳の仕事をしている。

寄稿

北の鉄路の再生・存続と地域発展をめざして

小田　清

２０１６年11月18日、ＪＲ北海道は鉄道部門の深刻な赤字経営を理由に、道内鉄路の半分近くに当たる10路線13区間を「ＪＲ単独では維持困難」とし、軌道・橋梁・トンネル等の費用の一部を自治体が負担する協議に入りたいと発表しました。そして、負担できない場合は、「廃線」あるいはバス転換を考えたいとしました。

そもそも、ＪＲ北海道の経営危機は、１９８７年４月に国鉄が分割・民営化された時から危惧されていたもので、毎年約５００億円近くの赤字が予想されていました。このため、政府はＪＲ北海道のために経営安定基金６８２２億円を積み立て、その運用益（利回り７・３％、４９８億円）で赤字を解消しようとしました。当初は想定内で推移しましたが、バブル経済崩壊以降の利回りは半分近くに下がり、運用益も半減しました。この目減りが積み重なって経営危機を招来したのです。

本来、全国一律で安定的な交通の確保は、公的インフラ施設として整備しなければなりません。同じ交通施設でも道路や港湾、空港は公共事業として公的資金で建設・維持されています。その施設を自家用車やバス、トラック、船舶、航空機が利用していますが、建設費は負担していません。これに対して鉄道は施設と車輌が一体で丸ごと負担しています。特にＪＲ北海道の場合は、長大路線と積雪寒冷という本州にはない悪条件を抱えての経営で、赤字が嵩張らざるをえません。したがって、私たちの交通権は公的資金で確保することが求められます。

鉄道は通学・通院・買い物だけでなくビジネス活動・貨物輸送・観光など、日々の暮らしや産業に直結しています。特に北海道にとっては、日本の食料基地としての農水産物の輸送、国際的に人気が急拡大している観光にとって欠かせない移動手段です。さらに、北海道の鉄路が持つ歴史的・文化的価値は、地域の未来を切り開く上でかけがえのない財産です。このような公共交通の要としての鉄道の廃止は、地域の一層の過疎化を促し、ひいては北海道経済全体の地盤沈下をもたらすことが懸念されます。鉄道線路はひとたび廃止されれば復活はほぼ不可能で、その存廃は慎重に議論されなければなりません。

私たちは何としても北の鉄路を再生・存続し、地域発展の軸に据えなければなりません。現在、鉄路再生に向けて署名活動を実施中ですが、鉄路の必要性をもっともっと広めなければなりません。そのための講座を「遊」で６月から４回行います。是非ご参加下さい。

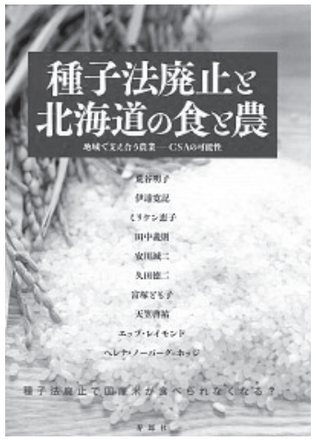
小田　清（こだきよし）
１９４７年生、全国・北海道の地域づくりを研究、ＪＲ北海道研究会会員、北海学園大学名誉教授

「北海道の鉄道の存続・再生を求める道民署名」実施中。署名用紙、パンフレット「北海道の鉄路の再生を考える～８つのポイント～」（写真、１部１００円）は「遊」事務所まで。

明日はつんどく屋で買ってほしい・・・

『種子法廃止と北海道の食と農』

寿郎社・発刊（A5判、168頁、1600円・税抜き）



今年の三月三一日で主要農作物種子法（種子法）が廃止されました。この法律は国が予算を確保し、都道府県に稲・麦類・大豆の安定的な種子生産を義務付けていましたが、その法律が突如として廃止されたのです。

突如というのは衆参両議院でたった一二時間しか審議されずに廃止されたからなのですが、「種を制する者は食料を制する」といわんばかりに海外で種子の囲い込みを続けている外国の多国籍企業を優遇する環太平洋連携協定（ＴＰＰ）が締結された時から、日本の種子が狙われるのも時間の問題だったのでしょう。

主要農作物の種子は、私たち国民、道民の共有財産であり公共財です。また食料安全保障の要でもあります。ですから国が予算を付けて都道府県に種子の生産と普及を義務付けていたのです。種子法廃止は地方自治体が担ってきた種子の生産過程を、海外を含めた民間企業に委ねていこうというものです。

この本では種子法が今まで果たしてきた役割や廃止後の課題、懸念などを有機農家やジャーナリスト、研究者、環境活動家ら一〇人がさまざまな角度から取り上げています。四部構成で一部では自家採種もする有機農家ら3人が生産現場から廃止の影響などを危ぐし、空知管内長沼町の荒谷明子さんは「種子の価格が値上がりしたり変動したりするのではないか」と語っています。

二、三部では廃止に至った経緯や外国籍企業が進める世界での種子支配の中での廃止の意味などをまとめており、遺伝子組み換え作物やゲノム編集といった先端の育種と種子法廃止との関わりも指摘します。環境ジャーナリストの天笠啓祐さんは道立農業試験場の育種研究者が民間企業に引き抜かれ、さらにその民間企業が海外の多国籍企業に買収される可能性を示唆します。四部では種子法廃止後に北海道農業をどう作り上げていけばよいのかを「ＣＳＡ（地域で支える農業）」をモデルケースとして提案しています。

日本には昔、何千種類もの稲がありましたが、今は三〇〇種余りまで減っています。種子生産を担う民間企業が利益にならないと判断すれば、その種類はさらに減っていくでしょう。将来、私たちが経験していないような気候変動などが起きれば、今ある種子はその気候に対応できなくなる可能性もあります。

その時必要なのは多種多様な種子の存在です。その多様なタネの中から厳しい環境に適応できるタネが生まれてくるのです。私たち人類は種子を品種改良することはできますが、つくり出せません。一度種子を失うと、二度とその命を次世代につないでいくことができないのです。多様な種子を守っていくためにも、「タネはだれのものなのか」を考えていきたいのです。

安川誠二（やすかわ せいじ）
1961年生まれ、北海道新聞記者などを経て現在、農業専門紙記者の傍ら書籍編集にも携わる。

オーガニック・自然食品専門店
有機やさいと加工品！
配達もやってます！
らるばた
札幌市中央区大通西23丁目
tel 614-2406 Fax 614-3836
http://rarubatake.com
AM10時～PM7時（日曜PM5時）

ひがしさんの ボロボロ日記

東　龍夫

第97回

by 飛郎

ペットボトル、そろそろ止めようか？

ペットボトルリサイクル推進協議会によると、日本で消費されるペットボトルは年間227億本（2016年）。赤ちゃんから100才を超えるご長寿のおじいちゃんおばあちゃんまで含めて、一人年間190本（！）を消費していることになります。同協議会によると、使用済みのペットボトルは約50万トン回収されていて、リサイクル率は83.9％（2016年）。回収されたボトルは、粉砕・洗浄されてペレット（プラスチックの粒）に加工されます。そのペレットを原料に、プラスチックシート（卵パックなどになる）・繊維（ポリエステル繊維になり絨毯などになる）・ペットボトル（再生ペレットを一部混ぜて作る）などが作られます。50万トン回収されたボトルの内、22．1万トンは、実は海外に輸出されています。これまで多くは中国に輸出されて来ました。ところが中国政府は昨年、「ゴミの輸入を止める」と突然宣言。ペットボトルリサイクルは大きく混乱しています。

そんな中世界では今、「ペットボトル、そろそろ止めようか？」という動きが広がっています。日本ではお茶のボトルが多いのですが、アメリカではミネラルウォーターのボトルが多くなっています。ニューヨーク市では、「環境のことを考えて、水道水を飲もう」というキャンペーンに取り組んでいます。ペットボトルの生産には石油が使われるわけですが、アメリカではその生産に27億2000万リットルの石油が使われています。その量は、100万台の車が消費する年間の石油消費量に匹敵します。また、東大の研究者によるライフサイクル・アセスメントによると、ペットボトル水の環境負荷は、水道水の1000倍（！）になるという結果が出ています。

もうひとつ気になる報告があります。東京農工大学の高田秀重さんによると、ペットボトル本体ではありませんが、そのキャップからノニルフェノールという化学物質が溶け出しているというのです。ノニルフェノールは、子宮内膜症や乳がん、精子数の減少や生殖器の萎縮を招く環境ホルモンとして疑われている化学物質です。

サンフランシスコ市は市役所・公園などでのペットボトル水の販売を禁止しました。ドイツなどでは、環境負荷を低減させるために、洗って何度も使うリユースボトルを使われています。イギリスでは、会議などによく出されるペットボトル飲料の調達を10年前から禁止しています。日本でも長野県飯田市・愛知県安城市・京都府福知山市では、会議でペットボトルを使わないようにしています。奈良県生駒市では、公共施設の自動販売機の削減とリユースびん入りお茶の普及に取り組んでいます。

東龍夫（ひがし たつお）
一九五二年生まれ。再生資源回収業。大量消費社会から持続可能な循環型社会を目指して活動中。札幌市環境保全アドバイザー、北海道環境学習トレーナーを務める。

フィールドワークな日々

宮内泰介の

第七三回　済州島　四・三事件

三月、初めて済州島を訪れた。

済州島には、島出身の旧知の女性、Mさん（元北海道大学大学院生）が住んでいて、ユニークな活動をつづけているので、一度訪れたいと思っていた。彼女は、島のおばあちゃんたちの聞き書きを進めている。韓国のテレビ局KBSのローカル番組で、おばあちゃんを訪問して話を聞く番組ももっている。おばあちゃんたちから学び、社会を組み替えようとする彼女独自の活動だ。

済州島を訪れる前に彼女とスカイプでいろいろ話していると、おばあちゃんたちの話に、四・三事件のことがよく出てくるよ、四・三事件を知らないと済州島のことはわからないよ、と言われ、僕はあわてて勉強した。

まず手に取ったのは、詩人・金時鐘さんの『朝鮮と日本に生きる：済州島から猪飼野へ』（岩波新書、二〇一五年）。この本は、日本統治下の済州島で育ち、日本の文学や歌に傾倒する皇国少年だった金時鐘さんが、「解放」でとまどうところから記述が始まる。金さんは、その後、南朝鮮労働者党に入党して活動していたが、「四・三事件」を経験し、その弾圧の中で漁船で日本に逃げ、大阪で生きていく。近年の研究を踏まえた上で自分の体験を生々しくふりかえるその記述に、僕はたちまち引き込まれた。

四・三事件とは、済州島において、一九四八年四月三日に起きた南朝鮮労働者党による蜂起と、それにつづく、米軍・警察による大虐殺（とくに一九四八年一〇月からの半年間）の全体を指す名称。犠牲者の数は二・五～三万と推定されている。

韓国の民主化の中でようやく一九八〇年代から事件の解明が進み、現在、済州島にはいくつかの四・三事件記念館もできている。その一つ、北村里ノブンスンイ四・三記念館を訪れたが、そこは、わずか二日間で三〇〇人余りが虐殺された場所だった。僕は、ただただこの事件の大きさ、残虐さの前に圧倒されるだけで、何をどう考えていいかわからなかった。

済州島は現在、第二空港建設問題に揺れている。今ある空港に加え、島の東部に新しい空港を建設しようという計画だ。Mさんに連れられ、反対派の住民たちの会合に出た。会合の場所は、空港予定地の反対派地権者の家。参加者の多くは、島の別の場所で海軍基地反対の運動を担った人たちでもある。会合は、小さな集まりだった。状況は大変厳しいが、朗読と音楽の和やかな会だった。

四・三事件のわかりやすい解説本（PDF）：済州四・三平和財団『済州四・三事件の理解』（http://bit.ly/2EIEDkP）

宮内 泰介（みやうち たいすけ）
1961年生まれ。さっぽろ自由学校「遊」共同代表。北海道大学教員（環境社会学）。ソロモン諸島、北海道、宮城などで、環境、生活の調査中。

いつだって No Nuke！

北海道のエネルギーの未来を考える
10,000人の会

Simple Life, High Thinking
小5から高3まで
スコーレ ユウ
NPO法人 森の学校ユウ
〒007-0866 札幌市東区伏古6条4丁目4-21
TEL. 785-0228
東苗穂校 東区東苗穂8条2丁目13 TEL. 791-5770

さまざまに俳句

～五・七・五の言葉の出会い～

第15回

世界最短の定型詩と言われる俳句。五・七・五で作られる世界。日常、見たり聞いたり感じたことを、忙しい日々に忘れてしまうその一瞬を、十七文字に込めてみました。

春の雨買ったばかりの傘の出番

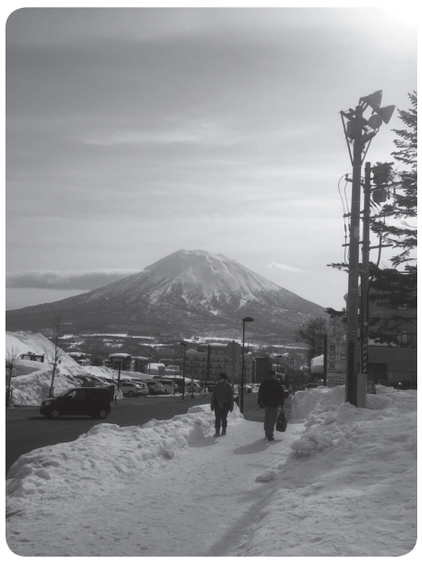
新しい傘を買った。冬の間、あまり傘は差さないので、ずっとしまったきりだったけど、雪が解け、寒さも和らいできた頃、みぞれまじりの雨が降ってきた。新しい傘の出番だ。新しい物は不思議と気持ちを新鮮にする。雨が降ると、早くあがらないかなあと思ってしまうけど、この時だけは心も喜んでいる気がする。子供の頃、傘をくるくる回して雨のしずくを飛ばして遊んだ。そんなこともしたくなる。新しい傘で。

内科・神経内科
札幌中央
ファミリークリニック
外来一般診療
月火木金9:00～12:00
札幌市中央区南１条西11丁目
海晃南一条ビル６Ｆ
TEL. 272-3455

自然食ホロ
札幌市東区中沼西
5条2丁目3－16
TEL：887-6224
いつも喜んで、
感謝して。
http://holo.sunnyday.jp/

賑わいも過ぎれば町ものどかなる

３月の始めに、ニセコに行った。スキーシーズンには多くの人々で賑わうニセコの町。欧米人、アジア人、日本人。いろんな言葉が飛び交う国際色豊かな町も、３月に入ると、ずいぶん人も少なくなっていた。シーズン中には多くの人が行きかうメインストリート、ひらふ坂も、人はまばら。落ち着いた静かな町も良いけれど、賑わった季節を知っているだけに少し寂しくも感じる。それでもスキー場のナイターの照明は、ハイシーズンと同じように、白いゲレンデを照らし、坂の下から見るその明かりは、とても綺麗。ナイター照明を見ながら歩く坂道。人の少なくなった通りは、かつて外国人なんて全然いなかったニセコの町を思い出す。のどかだったニセコの町。



事務局だより

「遊」29年目の春の講座がそれぞれ開講し、スタートの公開講座にもたくさんの参加と協力をいただいた。

「市民がつくる平和―核兵器禁止条約を力に」プレ公開講座では、ノーベル平和賞受賞のICAN川崎哲さんが、戦争被爆国日本が世界の核兵器廃絶の動きに加わらない異常さを指摘、市民の力で国民的議論を呼び起こす必要を投げかけた。

「記者たちの白熱教室―ジャーナリストを目指す君へ」プレ公開講座では、東京新聞の望月衣塑子さんの熱い記者魂に圧倒された。

だが、今年の春には、遊の運営を支えた人が二人、逝ったこともお伝えしなければならない。

一人は、金興一（キムフンイル）さん。「遊」の立ち上げメンバーのひとりだった。フンイルさんの経営する塾を週一日お休みにした教室で、社会問題と英語の２つのコースから「遊」は、スタートした。「遊」のコピー機や印刷機のリースは、フンイルさんの支援だったが、明かすことを好まなかった。まだ「遊」が専従をおけなかったときに、塾講師をしながら事務局を担っていた小泉さんを支えてくれた。３・11後には、福島の子どもたちの受験勉強付き夏休み保養にも全面協力していた。高校受験が終わるまで亡くなったことを伏せるようにと言ったのは、いかにもフンイルさんらしい逝き方だった。

もう一人は、濱崎じゅんさん。優しい笑顔と声、詩が好きでたくさんの詩を時には手書き詩集をつくって、時には朗読して出会わせてくれたじゅんちゃん。松葉づえの左右にバッグをかけて遊に来たじゅんちゃん。ここ何年かは闘病しながら仕事も「遊」も続けていた。福祉の講座、詩とキャンドルの夕べのコーディネーターをはじめ、豊平河畔の車いす駅伝大会に何年か続けて「遊」チームで参加させてもらったこともあった。

最後に「私の人生で『遊』と出会えたことが本当に大きなことでした」と言ってくれたけれどそれは、私たちからじゅんちゃんへの言葉でもある。

大通を「遊」に向かいつつ、桜やこぶしが花開いた春を歩きながら…。

（七尾寿子）

北海道平和運動
フォーラム
代表　江本　秀春
代表　清末　愛砂
代表　長田　秀樹
札幌市中央区北４条西 12 丁目
TEL.011-231-4157
FAX.011-261-2759
http://peace-forum.org/

2018年度前期講座　続々開講！

すでにいくつかの講座は４月より開講していますが、５月連休明けから2018年度前期の講座が本格スタートします。申込は随時受付中です。同封のチラシやカレンダー等をご確認のうえ、お好みの講座にぜひご参加ください。ウェブサイトからも申込できます。

http://sapporoyu.org/

編集後記

紙数の都合で海外暮らしの原稿は大幅に削らせてもらった。ルームシェアのあれこれや屋台飯など、載せられなかったのが残念。（ほ）

年度末の終えねばならない仕事を何とか乗り切ったと思ったら、４月は予期せぬことが次々と…。はい、「ゆうひろば」発行（本来、４月号）が遅れた言い訳でした。（こ）

さっぽろ自由学校「遊」　からのお知らせ

政治家との対話講座「選んだ人とざっくばらんに」2018 年度スタート！

この講座は、私たち自身のこれまでの「おまかせ政治」の意識を反省して始まり、双方向対話で政治の「今」と向き合ってきました。今年度も平均月１回を目途に各政党の各級議員・議員候補・首長・政党職員などと、ざっくばらんに対話出来る機会を設けていく予定です。その第１弾として、５月に２つの講座開催します。

①「あえて国民民主党（５月７日に希望の党から改組予定）に聞く！」

５月１４日（月）18:00 ～ 20:30（通常と時間が異なりますのでご注意下さい）

ゲスト：松木けんこうさん（希望の党・北海道２区総支部長）

会　場：南１西５愛生舘ビル６階「愛生舘サロン」

②「立憲民主党は今どうなっているの？」

５月２６日（土）18:00 ～ 20:30（通常と時間が異なりますのでご注意下さい）

ゲスト：道下大樹さん（立憲民主党・北海道１区選出衆議院議員）

会　場：南１西５愛生舘ビル５階５０１Ａ教室

●参加費：いずれも 500 円

特別企画

「林美子が語る、ニッポンジェンダー問題最前線！」

元朝日新聞記者でジャーナリストの林美子さんを迎え、女性記者へのセクシャルハラスメントから、痴漢や DV などの性暴力、女性の貧困や女性政治家の少なさなど、ニッポン社会における根深いジェンダー問題に迫ります。

日　時　６月６日（水）　18:45 ～ 20:45

会　場　さっぽろ自由学校「遊」（愛生舘ビル５Ｆ　５０１Ａ）

参加費　予約 1,000 円　当日 1,200 円　ユース 500 円

申込先　「遊」事務局　syu@sapporoyu.org

TEL.011-252-6752

生活クラブは、
ちょっと変わった
生協です♪
モットーは
「おいしくてカラダによくて
自然を壊さない」です
生活クラブ北海道　検索

ゆうひろば
発行：NPO 法人さっぽろ自由学校「遊」

〒 060-0061　札幌市中央区南１条西５丁目　愛生舘ビル５Ｆ 501
・郵便振替口座：　02780-5-47036（名義：自由学校「遊」）
・TEL:011-252-6752
・FAX:011-252-6751
・syu@sapporoyu.org
・http://www.sapporoyu.org

二次元コード読取機能付の携帯電話でこのコードを読み取ると、カレンダー情報のページにアクセスできます。携帯電話用のＵＲＬを直接入力しても同様です。
http://sapporoyu.org/m/